

Dockerfileコマンド一覧

Dockerfile命令	説明
FROM	イメージの土台となるイメージを指定。Docker推奨はAlpineイメージで、しっかり管理されていて、しかも軽量のLinuxディストリビューション。
LABEL	イメージ管理などのためのラベルを記載。
RUN	シェル内で実施されるコマンドを設定。
RUN apt-get	パッケージのインストールするために使う。長い行はバックスラッシュで複数行に分けて記載することが推奨されている。 apt-get updateとapt-get installは同じRUNの中で使わなければいけない。-yをつけるとインストール時の確認が省略できる。A && Bの記載は、Aが完了してからBを実施するということ。A BはAの実行結果をBに受け渡すということを示す。
CMD	イメージ内のソフトウェアを実行するために用いる。CMD ["実行モジュール","引数1","引数2"...]の形式をとる。Docker runの時に実施される。
EXPOSE	コンテナ実行時のコンテナ側のネットワークポートを通知する。docker run -pフラグで公開用ポートと割り当てて、ポートを指定する。
ENV	環境変数に対し、値を設定する。その値は途中で置き換え可能。 ENV <キー>=<値> 一度に複数の割り当てもできる。Docker inspectで確認できる。 変更するにはdocker run --env <キー>=<値>で行う。
ADD	ファイルを指定の場所に追加する。元ファイルの指定で、*や?などのワイルドカードが使用できる。元ファイルがローカルで、tar形式の圧縮ファイルの場合、自動でディレクトリに展開する点がCOPYと違う。
COPY	ファイルを指定の場所に追加する。元ファイルの指定で、*や?などのワイルドカードが使用できる。ADDより優先される。
ENTRYPOINT	イメージ内のソフトウェアを実行するために用いる。 ENTRYPOINT ["実行ファイル","パラメータ1","パラメータ2"]
VOLUME	指定した名前で作成する。VOLUME ["/data"]の形式でダブル・クォート (") で囲むJSON配列か、VOLUME /dataの形式のどちらかで記述する。ホスト側のディレクトリはマウントされない。
USER	実行ユーザーやユーザーグループを指定する。 USER partick などと記述。
WORKDIR	作業ディレクトリを指定する。 WORKDIR b などと記述。
ARG	イメージをビルドするときに、-build-arg <変数>=<値>で渡す変数を定義しておく。デフォルト値を設定することもできる。
ONBUILD	後からイメージのベースとして使われるときに実行する命令を記述する。
STOPSIGNAL	コンテナ終了時に送信される信号（符号なし整数）を設定する。
HEALTHCHECK	コンテナ内部でコマンドを実行し、コンテナの正常性を確認する。
SHELL	シェル形式のコマンドを入力できる。